

『黄色い魔女』 イエロー・ウィッチ

作 高橋広間

登場人物

ミドリ・ソヨカゼ

ナルシス

男 1 (町の責任者)

男 2 (ペット連れのおじさん)

女 1 (魔女)

女 2 (編み物好きのおばさん)

第一場

早春。沈丁花の季節。3人半掛けのベンチが一つ。
朝もやの中に黄色い朝の光が広がってゆく。

第一景

男1がベンチで新聞を広げている。
ナルシス登場。ベンチにすわる。

ナルシス : 風船を見ると思い出します。小さい頃、空を飛んでいる赤い風船が欲しくてお母さんを困らせたことを。でも、今の僕たちは知っています。あの風船には決して届かないのだと。あきらめる他に、手はないのだと。

女2登場。すわって編み物を始める。

男2、ポチを連れて登場。ポチが犬とは限らない。例えばサボテンとか。

女2が男2を呼び、ベンチに座る場所を空ける。

玉突き式にナルシスが落ちる。

男2 : いよいよ今日ですね。

女 2 そう、今日ですね。

男 1 そのとおりです。

ナルシス : 古い言い伝えによれば。

男 2 本当に現れるんですかね。

女 2 もちろん現れますとも。

男 1 現れます。

ナルシス : 古い言い伝えによれば。

男 2 魔女はどうやってこの町に来るんですか？

女 2 ほうきに乗って来るのよ。決まっているじゃない。

男 1 いいえ。魔女は隣り町から歩いて来るんです。

ナルシス : 古い言い伝えによれば。

男 2 隣り町から!? すると隣り町には、もう魔女が来ているんですか？

女 2 まさか?!

男 1 いいえ。そのとおりです。そして何百年かに一度、サタンの命めいを受けて魔女が町に現れると、疫病えきびょうが広く流行し、草木は枯れ、家畜は死に、人はもだえ苦しみ、町は滅びてしまうのです。古い言い伝えによれば。

ナルシス でも、隣り町の人々は元気で暮らしています。

男 1 ! それは東側の隣り町の話でしょう。私が言っているのは西側の隣り町のことです。

女 2 でも、西側の隣り町の人々も元気だったわ。

男 1 では、魔女がいるのは南側の隣り町です。

男 2 南側の隣り町の人々も元気でした。

男 1 では、北側です。

ナルシス 北側は砂漠です。どこまで行っても町はありません。

男 1 なるほど。わかりました。東側の隣り町も西側の隣り町も南側の隣り町も、全て魔女の手に落ちてしまっているんです。

ナルシス 男 2 女 2 え？

男 1 三つの隣り町はすでに滅びてしまっています。

ナルシス しかし…。

男 1 いいですか、魔女の疫病は恐ろしいものです。つまり、三つの隣り町の人々は自分が疫病に冒されていることに気づかずに元気に暮らしているんです。

女 2 すると中には、自分が疫病で死んでしまったことにも気づかずに暮らしている人がいるわけですか？

男 1 そのとおりです。

女 2 まあ、恐ろしい！

男 2 人々に自覚症状のないことが、町が滅びてしまった証拠なんですわ。

男 1 そのとおりです。

女 2 では、もしかすると私たちも疫病に冒されているかもしれませんね。

男 1 そう言えば私も、疫病にかかったという自覚症状がないわ。

男 1 それは大丈夫です。この町に魔女が来るのは今日です。魔女が来なければ疫病にはかかりません。

女1、男装で登場。

男 2 それで、魔女というのは、やはりしわだらけのお婆さんなんですか。

女 2 それはそうよ。私たちが知っている昔ばなしの魔女は、みんな醜い老婆じゃないの。

男 1 いいえ、違います。魔女は若い女です。魔女裁判にかけられ火あぶりの刑を受けたのは、いつでも若い女だけです。

男 2 すると、あの醜い老婆たちは魔女ではないのですか？

男 1 いいえ、魔女かもしれません。けれど彼女たちは、魔女裁判の栄誉を受けることのできなかつたハミダシ者なのです。私たちは醜い者を魔女裁判の主役とは認めません。

女 2 なぜ？ なぜ、若い女でなければいけないの？

男 1 魔女とはすなわち、魔の女、「まおんな」だからです。

男2女2 まおんな？

男 2 何です？

女 2 ……こういうことかしら。夫婦の間に割り込んで幸せに水をさす若い男のことを「まおとこ間男」と呼ぶでしよう。

男 2 まおとこ…。

女 2 だから、夫婦の幸せに水をさすような女が「まおんな間女」なのよ。
男 2 なるほど、「まおんな」は若い女だ。

ナルシス でもそういう女のことは「愛人」というんです。学校ではそう習いました。

男 1 そのとおりです。「まおんな」は「愛人」とも呼ばれます。「まおんな」、すなわち魔女は二つの顔を持つているんです。

男 2 なるほど。だから魔女は、かわいくて、気立てがよくて、優しくて、美しくて、なまめかしくて、思わず抱き締めたくなるような若い女なんですわね。

男 1 愛人にそこまで要求してはいけません。愛人はただ、若ければいいんです。

男 2 若いことだけが、魔女を見分ける唯一の方法なんですか？

男 1 そのとおりです。

ナルシス そんなの無茶苦茶だ！

男 1 どこが無茶苦茶なんです？

ナルシス だって…、無茶苦茶じゃないか！

男 1 無茶苦茶なのは魔女の方です。その若さにものを言わせ、多くの人々を遠い世界へと追放してしまつたのですから。

ナルシス でも…。

男 2 しかし彼女さえも今日は、この魔女裁判の晴れ舞台で美しく絶えてゆくわけですね。

女 2 この沈しんちようげ丁花の香りに包まれて、はかない命を閉じるのね。

男 1 うかれてはいけません。一步間違えれば私たちも犠牲になるんですよ。相手は魔力を使うんですから。シッ！

女1、ナルシスに近づき、前に連れ出す。

女1 おい、どうしたんだ。

ナルシス ああ。

女1 うまく行ったのか？

ナルシス ううん。

女1 やっぱリダメだったのか。

ナルシス うん…。

女1 そうか…。お前、真面目にやったのか？

ナルシス うん。…でも、どうせダメなんだ。

女1 なぜ？

ナルシス 始めから、ダメに決まっていたんだ。

女1 (平手打ちをくわせる)

女2 (思わず飛び出して) およしなさい！

女1 ほおっておいてください。これは僕たちの問題です。

女2 そんなことはないわ。何でもかんでも暴力で解決できると思ったら大間違い。もっと大きな心をお持ちなさい。やさしい心だけが全てを解決できるの。やさしさだけが人生よ。

女2、満足気に去る。女1、キョトンとしている。

男 2

(ナルシスにそっと近づき) どういうつもりだ。ただ殴られているだけなんて。男だろう。男なら殴られる前に逃げるんだ。喧嘩は勝たなくちゃいけない。逃げるが勝ち、って言うじゃないか。(女1の視線に気づき) …ポチ、行こうか。

男2退場。ナルシスと女1、顔を見合わせる。

女 1

(吹き出して) 何だ、あいつら。

女1、ナルシスの肩を叩きうながして退場。

男 1

あやしい、あまりにあやしすぎる…。「おい、どうしたんだ」「うまく行ったのか?」「やっぱりダメだったのか」「お前、真面目にやったのか?」「でもどうせダメなんだ」「始めから、ダメに決まっていたんだ」(平手打ちの音)…。あの二人は何かを企んでいる。しかもあの一人は女。男の姿をしても私は騙されない。…あの女が魔女か? いいえ、それはかんがえられないな。あのタイプは、疫病を流行らせるよりも、おたふく風邪がせいぜい、というところだ…。

ミドリ登場。アイドルのような元気な曲に乗って。

ミドリ

うーん、いい香り。沈丁花の匂いだわ。するとここは、春と冬の境目。(地図を見て)このあたりかしら、ずいぶん来てしまったのね。

男一、背後からそっと近づく。

男一 お嬢さん！

ミドリ (驚いて) はい！

男一 ずいぶん驚かれたようですね。心にやましいことでもあるんですか？
急に声をかけられたら、誰だって驚きます。

男一 なるほど、それもそうですね。…ところで、お見かけしない顔ですが、
旅行者なんです。

ミドリ ではパスポートを拝見します。

男一 (パスポートを渡す)

ミドリ (見ながら) 確認します。お名前は？

男一 「そよかぜみどり」

ミドリ ソヨカゼ…。お歳は？

男一 「十七歳」です。

ミドリ 十七歳…。お若いんですね。国籍は？

男一 「日本」です。

ミドリ ニッポンですね。

男一 いいえ、にほんです。

男一 ニッポンって書いてありますよ。

ミドリ
いいえ、にほんです。

男 | ニッポンじゃないんですね。：しかたありません。では国籍は不明ってことで妥協しましょう。(パスポートを訂正し返す) あまり強情な性格は、不幸を招きますよ。

ミドリ
(ムツとして) あなたは何なんです？

男 | さあ、私は何でしょう。1番この町の住人、2番この町の住人、3番この町の住人、4番この町の住人。5番わからない。

ミドリ
(なげやりに) 5番。

男 | そのとおりです。私は「わからない」んです。ある時はこの町の町長、ある時はこの町の刑事であり、ある時は裁判官でもあります。そしてあえて肩書をつけるとすれば、私はこの町の責任者です。それならそれで、余計な心配はしなくてもらいたいわ。

男 | 余計な心配？ ああ、あなたが不幸になるという話ですか。それはそうです。そういうことは、あなた自身がよく反省しなくては。

ミドリ
失礼します。(去りかける)

男 | お待ちなさい。あなたは試されているんですよ。
ミドリ
え？

男 | 今日、この町に魔女が来るという言い伝えがあるんです。ここで逃げ出すと、あなたに疑いがかかりますよ。

ミドリ
…。

男 | … 魔女は隣り町から歩いてくると言われています。

ミドリ え！

男 べつにあなたを疑っているわけではありません。…なにしろ魔女は若い女だということですし。

ミドリ え！

男 大丈夫です。私は信じていますから。…いくつか、型通りの質問に答えていただけますか？

ミドリ ええ…。

男 お好きな食べ物は？

ミドリ えーと、何でも好きです。アイスクリームも天ぷらも、ウナギも梅ぼしも、カニもシイタケも、日本酒もバーボンも栗ようかんも。

男 はあ。それは食べ過ぎです。で、デザートにタピオカはいかがですか？
もちろん大好きです。

男 魔女はタピオカが好物なんです。ニンニクなんて嫌いですよね。

ミドリ いいえ。私、ニンニクは大好きです。

男 最近の魔女はニンニクやラッキョウで精力をつけているそうですね。

ミドリ 魔女じゃありません！

男 疑ってなどいませんよ。ところでピチャスーじヤはお好きですか？ あれ、ピチャスーじョだったかな。いかがですか？

ミドリ ピチャスーじヤなんて知らないわ。

男 知らない、それはよかった。ピチャスーじヤもピチャスーじョも、私のでまかせですからね。魔女に聞いてもおそらく知らないと言うでしょうね。

ミドリ ー 私、魔女じゃありません！

男 ー はいはい。誰もがそう言うんです、「私、魔女じゃありませんー」って。でも、あなたは魔女です。私は始めから信じていましたよ。そうじゃないなんて疑いは、一度も抱きませんでした。だって、あなたの気の強さは魔女そのものなんです。なにしろ気の弱い娘だと、裁判の途中で泣きわめいたりして時間がかかって大変なんですよ…

ミドリ ー 待ってよ。私、魔女じゃありません。

男 ー 証明できますか？

ミドリ ー パスポートがあります。

男 ー 魔女だってパスポートくらい持っていますよ。

ミドリ ー …ほら、このアクセサリーは十字架なのよ。私、十字架なんかこわくないわ。
十字架を恐れるのは、キリスト教系の魔女です。あなたは日本人にっぽんじんでしたね。宗派が違うんじゃないわ。あなたには十字架を恐れるのは、キリスト教系の魔女です。あなたは日本人にっぽんじんでしたね。宗派が違うんじゃないわ。宗派が違

ミドリ ー …魔物はよく、ヒイラギの葉っぱやイワシの頭をきらうっていうでしょう。でも私は平気、大丈夫よ。ずいぶん古い慣習を持ち出しましたね。とても十七歳とは思えませんね。

男 ー いったいどうすればいいのよ！
あなたがどうしても魔女ではないと言うのならお教えしましょう。一つだけ助かる方法があります。しかし、とても危険です。

ミドリ ー 教えて！ 私、魔女じゃないのよ。

男 ー 裁判の途中で弁解のチャンスが与えられます。問題は身をもって無実を証明するだけの覚悟を、あな

第二景

たが持っているかどうかです。しかし、その前に逃げ出そうとすれば、裁判抜きで即座に火あぶりです。ご注意を。では失礼。

男1退場。ミドリ、呆然と立ち尽くす。

ベンチ。女1が男装で新聞を広げている。

女2登場。すわって編み物を始める。

男2、ポチを連れて登場。すわる。

魔女が捕まったらしいわ。

若くて元気な女の子だそうですね。

そのとおりです。

魔女裁判の主役がやっと決まったのね。今日のために何年も準備してきたのよ。わくわくするわ。

それはみんなそうですよ。数百年に一度という歴史的な行事を、私たちはこの目で見る事ができるんですから。

そのとおりです。

それにしても今日はいい天気ね。絶好の裁判日和だわ。

そうですね。ただ僕は魔女裁判には、もっとどんよりと曇った暗いイメージを持っているんですが。

女 2 それもそうね。なにしろかぜがつめたいから、こうしてベンチで編み物をしていると寒くて。

男 2 そうなんですよ。もっともポチにとってはいい気候なんでしょうね。ほら、とっても気持ちよさそうにしていますよ。

女 1 シッ！

ナルシス、画架と椅子を持って登場。背を向けて絵を描き始める。突然手を止め、肩を震わせる。

女 2 不愉快だわ。人のことを横目で見て、突然笑いだすなんて。どういうつもりかしらね。

女2、憤然として退場。

男 2 (声をかけようとしてやめて) 何だ、ただの貧乏ゆすりか。

男2退場

女1、前に出てキャンバスを破り捨てる。ナルシスを前に向かせる。

女 1 あれでいいのか？

ナルシス うん？

女 1 お前、またしくじったんだろう。

ナルシス うん…。

女 ー 今の連中の話を聞いたか？ 突然笑いだしたとか、貧乏ゆすりだとか勝手なこと言いやがって。お前、なんとも思わないのか？

ナルシス 世の中なんてそんなものさ。彼らは彼らなりに僕のことを理解しようとしてくれたのかもしれないけど全然わかつちやいないじゃないか。お前が悲しみをこらえていることに気づいた奴はひとりもいないんだぞ。

ナルシス しかたないさ。始めからダメに決まっているんだ。

女 ー、平手打ちをくわせようとする。

ナルシスがうまくよけて、女 ーは力余って転倒する。

女 ー どうしてそういうあきらめ方をするんだ。そんなことじゃ、お前は本物のピエロになってしまふぞ。僕はピエロでいいんだ。まわりの人々を楽しませることができれば、それでいいんだ。

女 ー 違うんじゃないのか。お前はまわりを楽しませているつもりかもしれない。でも、奴らはそうは思っちゃいない。お前をバカにして笑っているだけだ。だからお前が本当に悲しい時にも、誰にもわかってもらえないんだ。涙を流せば流すほど見ている連中は大笑いだ。

ナルシス でも、ピエロにはいつだって一人の少女がついていて、物陰からそっと見守っていてくれるんだ。

ミドリ登場。物陰からそっと見ている。

女 ー そしてピエロが一人で泣いている時に、少女が駆け寄ってこう聞くんだ。「何が悲しいの？ なぜ涙を

流すの？」 その時、お前に答えるセリフがあるものか。

女一のセリフに合わせて、ミドリが動く。

女一ナルシス ……ピエロが一人で泣いている時に、少女が駆け寄ってこう聞くんだ。

女一 何が悲しいの？ なぜ涙を流すの？ そんなにつらそうにしていると、私まで泣きたくなってしまう。

ナルシス 大丈夫だよ。何も悲しいことなんかないんだ。僕はピエロだもの、みんなが笑ってくれればそれで満足なんだ。泣いているんじゃない、ふりをしているだけさ。

女一 でもとても悲しそうな目をしているわ。

ナルシス そんなことはないよ。…もし、たとえそうだとしても、僕はピエロだもの、誰にも関係ないことさ。

女一 ……私にも？

ナルシス ……ああ、君にも。

女一 ……私にも関係ないことなのね。

ナルシス 君にも関係ないことさ。

女一 ……悲しくなんかないのね。

ナルシス 僕はピエロだもの…。

女一 ……。

ミドリ退場。

ナルシス ……。

女 ー (ひきつった笑い) ハハハハハ。大笑いだ。お前を見守ってやれる少女なんているものか。いつまでも夢の中に閉じこもっていると、その悲しみが今にかからに干からびてしまうぞ。そしてそれが真っ黒な石になって心の中を転がり、お前を悩ませるんだ。魔女によってされた男たちのような真っ黒な石だ。

ナルシス 魔女なんかいるものか！

女 ー そう、魔女なんかいるものか。

ナルシス 何百年かに一度、サタンの命を受けて魔女が町に現れると、疫病が広く流行し、草木は枯れ、家畜は死に、人はもだえ苦しみ、町は滅びてしまうのです。古い言い伝えによれば。
女 ー そんな魔女なんか、いるものか…。

ナルシス退場。

女 ー 踊り狂う。男装から魔女の姿になり退場。

第三景

ベンチ。

女 2 登場。すわって編み物を始める。

男 2、ポチを連れて登場。すわる。

ナルシス登場。すわる。

女 2 気持ちのいい日ね。

男 2 そうですね。

女 2 こんな日は子どもに戻って思いつきり：

男 2 思いつきり？

女 2 ひなたぼっこをしていたいわ。

男 2 地味な少女時代を過ごしていたんですね。

女 2 私、ベランダで本を読んでいるのが好きだったの。ポカポカと暖かい日射しの中で、自由に空想をめぐらせるのよ。そして自分が主人公になって、世界中を飛びまわるの。森のお城に住むお姫様、深い海の底にいる人魚姫、冷たい雪の町を歩く女の子…、あこがれたわ。あなただって、何かあこがれていたものってあるでしょう？

男 2 ええ、まあ、小さな頃からなりたかったものなら。

女 2 それは何？

男 2 結婚詐欺師です。

女 2 …苦労したのね、小さな頃から。

男 2 そうじゃありませんよ。

女 2 …よっぽど女の子で痛い目にあっただのね。

男 2 そうじゃありませんってば。

女 2 …フラれてばかりいると人間ってこうも卑屈になるものかしら。

男 2

いつまで言っているんですか。結婚詐欺師は、いつでもその時に本当に好きな人を愛しているんです。本当に好きなんだ、今は。でも将来のことはもしかするとわからない。だから「永遠の愛」という誓いを前にすると、つい逃げ出してしまふんです。自分の心に正直すぎるがゆえの悲しい宿命。これが結婚詐欺師の真実の姿なんです。そういう結婚詐欺師に僕はなりたかった。

女 2

結婚詐欺師ねえ。

男 2

気持ちのいい日ですね。

女 2

こんな日は子どもに戻って思いつきり…

男 2

ひなたぼっこですか？

ナルシス

(見上げて) あっ、風船だ。

女 2

(見上げて) ふうせんだわ。

男 2

(見上げて口笛で童謡「シャボン玉」を吹く) 屋根まで飛んで、こわれて消えた、

三人

風、風、吹くな、シャボン玉飛ばそ

男 2

落ちて来るぞ。

赤い風船が落ちて来る。三人、駆け寄る。

男 1

(声だけ) 危ない！ 風船に手を触れるな！

三人飛びのく。男1登場。

男 1 気をつけてください。羽もないのに空を飛ぶような連中にはね。そんな不合理なことができるのは、魔女とその仲間たちだけです。

女 2 でもこれはただの風船みたいよ。

男 1 赤い風船は人の心を酔わせておいて、突然に破裂してその心を傷つけます。赤い色は情熱の色。情熱を胸いっぱい膨らませ、ふわふわと浮かんでいただけでその身を破壊させてしまった、そんな男たちのことを御存知のはずですよ。(風船に) まだ飛ぼうというのか! 伏せろ!

男 1、風船に何かを投げつける。割れる。

男 1 (破片をつまんで投げ捨てる) いいですね。赤い風船にはくれぐれも注意してください。

男 2 あの…、赤い風船のことはわかりました。でも青い風船は?

男 2 青い風船は海の色、高く広がる空の色です。どこまでも果てしなく漂ってゆく気があるのなら、好きにしてください。

女 2 緑の風船は?

男 1 緑の風船はみずみずしい若葉の色です。向こう見ずしかとりえのない若さを、いちいち相手にするのはどうかと思いますね。

ナルシス では、黄色い風船は?

男 1 黄色い風船?!…それは何もわかっていない君自身のことです。この臆病者め。おくびょうもの

女 2 では、紫の風船は?

男 1 紫?! 三原色以外の色にはお答えできません。
女 2 でもさっき「緑」があったわ。

男 1 緑はかまわないんです。

男2女2 なぜ?

男 1 赤と青と黄色の三原色を混ぜると黒になります。黄色の代わりに緑を入れれば「光の三原色」です。

男 2 赤と青と緑ですわね。

女 2 光の三原色を混ぜると…。

男 1 「白」になります。

男 2 まぶしくて何も見えないわけですね。

女 2 私は「白紙の状態になる」っていうことだと思うけど。

男 1 理由づけは必要ありません。「白」になるんです。

ナルシス 「シロ」ならば無罪じゃありませんか。

男 1 理由づけは必要ないと言ったはずだ。

鐘の音。

女 2 まあ、大変。もうこんな時間よ。

男 2 急いで裁判の準備をしなくては。

男 1 そのとおりです。

男1 男2 女2、退場。

ナルシス : 僕が黄色い風船? 何もわかっていない臆病者? どういう謎なんだろう。: いいや、騙されてい
るだけなんだ。そうだ、信じられるのは自分の心だけなんだ。

男2 女2がナルシスを呼びに来る。 三人退場。
ミドリ、フラフラと登場。

ミドリ 町中が春ね。でも私の心は冬だわ。: こんな時に涙が出ないなんて、私、どうかしているのかしら。
この香りのせい? そうかも知れない。聞いたことがあるわ、沈香じんこうと丁子ちようじの二つの香りを持つから
沈丁花しんちやうげって呼ばれるって。今、私も絶望と希望の二つの心を揺れ動いている。ううん、理屈じゃない
わ。ただ私は沈丁花の香りが好きなだけ、それだけ。

女1 登場。

女1 どうかしましたか?

ミドリ しらじらしい。私が魔女として裁判されることは、町の人なら誰でも知っているはずよ。

女1 それで、あなたは魔女なんですか?

ミドリ いいかげんにしてよ。私は魔女なんかじゃないわ。

女 | それなのに平気なんですか。

ミドリ | これが平気に見えるの？

女 | 何もしなければ魔女にされてしまいますよ。

ミドリ | どうしようもないじゃないの！

女 | いっそなんてしまったらどうです？

ミドリ | え？

女 | いっそのこと、本当に魔女になってしまおうんです。火あぶりの前に、あなたを裁判にかけた男に呪いをかけ、雲を呼び、嵐を起こして、町を不幸にしてしまおうんです。それでこそ、あなたは魔女裁判の真の主役です。

ミドリ | 怖いわ。

女 | 怖くありませんよ。魔女はいつでも女の味方です。シンデレラは、魔女のおかげで王子様の舞踏会に出かけることができました。

ミドリ | でも十二時までしかいられなかったわ。

女 | 人魚姫は魔女の力で人間の姿を手に入れました。

ミドリ | そのために長い美しい髪と、澄んだ声を失くしたわ。

女 | フランス軍は一四二九年五月八日に、魔女ジャンヌ・ダルクの力でイギリス軍を撃退しました。

ミドリ | フランス軍が勝ったことと魔女が女の味方であることは関係ないんじゃない？

女 | もちろん魔女は万能ではありません。だから、限界もあれば手違いもあります。

ミドリ | 白雪姫の魔女はどうなの？ 眠れる森の美女に出てくる魔女は？

女 | 魔女だってもとはただの女ですもの。嫉妬をすることだってあります。

ミドリ | じゃあ、ヘンゼルとグレーテルに出てくる魔女は？ 二人を太らせて食べてしまおうとしたのよ。

女 | (聞こえないふりをして) 女だけが魔女になれるんです。惚れ薬も呪いの呪文も空を飛ぶほうきも、

すてきなものが何でもあなたのものになるんですよ。

ミドリ | ねえ、グレーテルは女の子だったのよ。

女 | 魔法の言葉を唱えれば、大好きな人を石にして、いつまでも大切にとっておくことができます。

ミドリ | 魔女はグレーテルのことを食べてしまおうとしたのよ。

女 | うるさいわね！ 人のあげ足を取らないでよ。中には悪い魔女だっているわよ！

ミドリ | (怯えて) 怖い…。

女 | (あわてて) こわくなんかないのよ。魔女は素敵よ。

ミドリ | でも…。

女 | 難しいことじゃないのよ。この契約書にサインするだけで、あなたは魔女になれるのよ。(渡す)

ミドリ | (よむ)「契約書。私は次のことを条件に魔女になります。条件、私は魂たましいを譲り渡します。」 え?!

魂を。

女 | そう。でも、死んだ後でもいいのよ。

ミドリ | だけど、魂を…。

女 | 魂ってそんなに大切なものかしら。私はわからないなあ。もっと大事なものがあろうと思うわ。だって、

魂なんて、好きな人ができたらすぐに奪われてしまうじゃない。

ミドリ | でも…。

女一 奪われたって魔力は手に入らないのよ。だったら自分から捧げて、魔力をモノにした方が利口じゃないの。

ミドリ 私…。

女一 まあいいわ。その気になったらいらっしやい。でも、火あぶりになってからでは遅いのよ。

女一、ミドリを残して退場。

第二場

ベンチ。

男2女2、せわしなく行きかう。

男1ナルシス、言い争いながら登場。

男1 わかりました。君の言いたいことはよくわかりましたよ。

ナルシス いいえ。今日ははっきりと言わせてもらいます。魔女なんているはずがありません。

男1 それは君が知らないだけです。だいたい、魔女がいないならどうして私たちは裁判の準備をしているんですか？

ナルシス みんな、間違っているんです。

男1 妙なことを言い出さないでください。私たちは古い言い伝えに従っているんです。そう、君も聞いたことがあるでしょう。私たちのおばあさんのおばあさんの、そのまたおばあさんのおばあさんの代に魔女がこの町にやってきた話を。ほうきに乗ってきた魔女たちが、この町の人々を片っ端から石にしてしまったという話ですよ。

ナルシス ええ、もちろん聞かされましたでも信じられますか。ほうきが空を飛んだり、人間が石になったり。

男1 それが事実なんです。

ナルシス 非科学的です。

男1 科学の立場からも、これら全てのことは「魔力」のせいだと説明されています。

ナルシス そんな、まさか。

男 ー いいえ、その「まさか」なんです。

ナルシス 本当に科学的に説明されているんですか？

男 ー まさか。

ナルシス 僕を馬鹿にしているんですか？

男 ー そのとおりです。何もわかっていない人間に生半可な知識を振り回されては迷惑です。なまはんか

ナルシス でも、魔女がいるなんて信じられません。中世に大がかりな魔女狩りがありました。あの時に、若い

魔女はみんな殺されたはずじゃありませんか。裁判にかけられずにすんだのは醜い老婆ばかりだと、あなたはそう言いました。魔女なんているはずがありません。いいえ、一步譲ってもしいるとしても、老婆ばかりでどうやって若い魔女が生まれてくるんですか。

男 ー 理屈はともかく、いるんです。：古い言い伝えによれば。

ナルシス 言い伝え、言い伝えて、そんなもので魔女が存在するなんて決められるんですか！

男 ー いいえ。存在しなくてもいいんです。私たちにとって大切なのは「魔女がいる」ということです。た

かが一回の裁判のために、町の人々が何年間もかけて心を一つにして準備してきたのはなぜだと思いますか？

私たちはいつも、何かしら得体のしれない不安に襲われているんです。それは羽もないのに空を飛ぶようなもの、例えば魔女のせいです。だから地べたを這いずりまわるしかない私たちは、

不安から逃れる一つの方法として、魔女を火あぶりにするわけです。本物であろうが偽物であろうが、たとえ現実に存在しなくても「魔女」でさえあればかまわないんです。

ナルシス そんな！ いいかげんすぎませんか。

ミドリ、簡単な変装で登場。ベンチに座る。

男 ー 興奮しないでください。どうも混乱しているようだ。この町の多くの人々と行きずりの一人の女と、あなたはどちらが大切なんですか。

ナルシス どちらも大切だと思います。

女2登場。ベンチにすわる。

男 ー なるほど。いい答えですね。しかし現実的ではない。彼女一人が犠牲になれば、この町の人々みんなが救われるんですよ。

ナルシス 人、一人の命は地球全体よりも重いはずですよ。

男2登場。ベンチにすわる。

男 ー パラドックスですね。ではこう言ったらどうですか？ この町の人々みんなを犠牲にして、彼女を助けるつもりですか。

ナルシス (やけ気味に) ええ、そうです。

男 ー (ナルシスの目を見て) 思ったとおりだ。君はあの女に惚れていますね。しかしたった一枚の人相書にんそうがきに

恋をしてしまうなんてたわいもない。いいですか。恋は盲目もつもくと言って、恋をしている時には正しいことと間違っていることの見分けがつかなくなるものです。頭を冷やして来たらいかがですか。

(男一に) 準備が整いました。

そうですか。(見回して) 被告は？ ミドリ・ソヨカゼはどうしました。

はあ？

被告なしで裁判するつもりですか。どこへ行ったんです？

私は見ませんでしたよ。

私も。

僕もです。

男 1 まだこの町にいるはずですよ。急いで捜してこい！(ナルシスに) 君もだ。

男 1 男 2 女 2、急いで退場。

ナルシス (ミドリに気づいて) あの…。

ミドリ え!?

ナルシス 君は…。

ミドリ はい!?

ナルシス 君は被告を捜しに行かないんですか？

ミドリ (傍白ほうはく) ああびっくりした。バレたかと思ったわ。そうよね、変装は完璧ですもの。見破られるはず

はないわ。

ナルシス 今ならドサクサに紛れて逃げ出せるかも知れませんよ。

ミドリ え！？ ど、どういうことかしら？

ナルシス 君は、ミドリ・ソヨカゼさんでしょう。

ミドリ な、何を言いつ出すの。ミドリ・ソヨカゼは若い女よ。私はほら、頭はハゲだし、鼻は丸いし、ヒゲははえているし…。

ナルシス でも、人相書のとおりですよ。（人相書を見せる）

人相書には、変装したミドリの顔が描かれている。

ナルシス 本当に君が魔女なんですか？

ミドリ いいかげんにしてよ。私は魔女なんかじゃないわ。

ナルシス それなのに平気なんですか？

ミドリ これが平気に見えるの？

ナルシス 何もしなければ、魔女にされてしまいますよ。

ミドリ どうしようもないじゃないの！

ナルシス 僕にまかせてください。

ミドリ ；「魔女」の勧誘ならばお断わりよ。

ナルシス え？

ミドリ わたし、魔女になんかならないわ。

ナルシス 僕もそう信じています。

ミドリ どう信じているの？

ナルシス え？

ミドリ どうせ、私が魔女だって信じているんでしよう。

ナルシス はあ？ …ああ、ジョークですね。こんな時にもユーモアを忘れないなんて、温かい心を持っているんだなあ。

ミドリ …？

ナルシス 投げやりな気持ちにならないで。きっと僕が助け出しますから。

ミドリ あてにしないで待っているわ。

ナルシス …冷たいんですね。

ミドリ …助けたくなくなったの？

ナルシス いいえ。そういう冷たいところって好きだなあ。じゃあ、またあとで。

ミドリ ちよつと待って。まだ、名前を聞いていないわ。

ナルシス 僕は「ナルシス」です。

ミドリ ナルシス、ってあのギリシア神話の？

ナルシス ええ。湖に映った自分の姿を見て、あまりの美しさに魂を奪われ、そのまま黄色い水仙すいせんの花になってしまった、あの美しい少年と同じ名前です。

ミドリ 美少年ねえ。あなたのご両親はよっぽどあなたに期待していたのね。

ナルシス よくそう言われます。

ミドリ
ナルシス
ミドリ
ナルシス

そして、その期待の重みに顔が耐えきれなかったのね。
そこまで言われたのは初めてです。でも正直なんだなあ。僕の思ったとおりの人だ。
あなたも悪い人じゃなさそうね。ナルシス、頼りにするわ。
ありがとう。まかせておいてください。

ナルシス隠れる。

男 2 (声だけ) あそこにいました！

男1男2女2登場。

ミド리를床にすわらせて、男2女2はベンチにすわる。

男 1 それでは裁判を始めます。さて、それでは君。(男2を指名する)
男 2 はい。証言いたします。

証言もいいんですが、忘れていることがありませんか。

男 2 あ、宣誓せんせいいたします。

男 1 ちがいますよ。見回してみてもわかりませんか。あなた方はベンチにすわっているからいいでしょうが、私は裁判という思い任務を背負いながら、ずっと立っていませんからいいんですか。

男 2 はっ、気がつきませんでした。

男2、椅子をとってくる。

男1 まったく、一つのことには気をとられると、他のことに気が回らなくなるんですからね。さて証言を聞きましようか。それでは君からどうぞ。（女2を指名する）

女2 はい。私は今朝、道を歩いていました。右手に編み物を、左手に毛糸を入れたかごを持っていました。

今日は早起きをしたので、つい大きなあくびをしてしまったんです。そのとたんです。私は石につまづいて転んでしまったんです。このくらいの大黒い石でした。とても痛い思いをしました。

男2 どうして手について体を支えなかったんですか

女2 だって私は両手に物を持っていたんですよ。

男1 両手が使えない時に転んだわけですか。魔女が企たくらみそんなことですね。

ミドリ 何言ってるのよ。自分がトロいだけじゃない。

女2 何ですって！ トロくて転んだだけなら、こんなに痛いわけじゃないじゃない。それだけじゃありません。

そのせいで私は編み目の数を間違えてしまったんです。

男2 いつもは間違えないんですよね。

女2 いつも間違えますけど。

男1 いいでしょう。今日のは特別なんです。何しろ魔女のせいで間違えたんですから。

ミドリ 待ってよ。どうして魔女のせいだってわかるのよ。

男1 簡単なことです。彼女をつまづいた石を見ればわかります。色といい大きさといい、魔女の呪いのかかった石に間違いありません。古い言い伝えのとおりです。

ミドリ 理由になっっていないじゃない。

男 1 では、じっさいにその石を見て確かめましょうか。

ミドリ 見たって仕方ないわよ。

男 1 ですね。では次の証言。

男 2 はい。実はうちのかわいいポチが、ついさっきポックリと死んでしまったんです。あんなにかわいが

っていたのに……。あの女のせいです。あの女が呪い殺したんだ！

ミドリ そんなのヌレギヌよ！

男 2 お前だ、お前がポチを殺したんだ！

男 1 頭ごなしに決めつけてはいけません。ところでポチは、生前に死んだ経験はあるんですか？

男 2 いいえ。これが初めてです。

女 2 ポチは一度も死んだことがない。でも今日初めて死んだ……。

男 1 それでは疑う余地はないですね。いつもと変わったことと言えば、この町に魔女が現れたことだけです。とすれば、ポチが死んだのは明らかに魔女のせいです。

男 1 男 2 女 2 ジロツ！（ミドリを睨む）

ミドリ 私は知らないわよ！ そうだ。私、さっき魔女に会ったわ。

男 2 女 2 え？

男 1 うっかりノセられてはいけませんよ。

ミドリ 本当よ。ほら、証拠もあるわ。（契約書を見せる）「魔女になりませんか」って勧誘されたんだから。

男 2 魔女になるための契約書だ。

女 2 サインはしていないわ。

男 1 こんなものは子供だましです。魔女になるためには洗礼を受けるんです。契約書なんて。(破る) だいたい、どうしてこんなものを持っているんですか。

女 2 怪しい…。

ミドリ だから、勧誘されたのよ。魔女じゃないからこそ、魔女になりませんかっって勧誘されたのよ。怪しい…。

男 2 そんなことは弁解になりません。だいたい、あなたが無実を証明できる方法は一つしかないんです。その方法を教えてちょうだい。

ミドリ それはとても危険です。自分が魔女でないという確信と、それを体で示すだけの覚悟が必要です。難しいの？

女 2 難しくはないわ。でもあなたが魔女なら、やめた方が利口よ。

ミドリ 私、やります。

男 1 では服を脱いでください。

ミドリ え？

男 1 服を脱いでください。

ミドリ …男って狼だものね。なるほど、危険だわ。

男 1 そういう意味じゃありません。

男 2 裸になって、おもりを体にしばりつけて、そのまま川に飛び込むんです。もし生きて浮かべば魔女、そうでなければ晴れて無罪…。

ミドリ そうでなければ、って浮かばなかったら溺れちゃうじゃない。

女 2 溺れ死んだら無実が認められるわ。そうすれば浮かばれるじゃない。

ミドリ 私に死ねって言うのね。

男 1 そうは言っていないません。けれど、生き残れるのは魔女だけです。

ミドリ 冗談じゃない。私やめるわ。

男 2 いいんですか。たった一つの方法なんですよ。

ミドリ やめるわ。

男 1 そうですか。これは自白をしたようなものですね。それでは判決にうつります。被告ミドリ・ソヨカ
ゼが魔女であることは明白です。そして私たちはすでに魔女の呪いによって大きな被害を受けていま
す。この女に、どういう刑罰を与えましょうか。

女 2 死刑よ、死刑、死刑に決まっているわ。それも火あぶりの極上のスペシャル。

男 2 焼きあがった後にワインで乾杯するやつですね。

男 1 それでは「火あぶりの極上スペシャル」で賛成の方。

男 1 男 2 女 2 はい。

男 1 満場一致ですね。これが真の民主主義です。

ミドリ 私は賛成していませんわ。被告も採決に参加するのが真の民主主義だと思うわ。

男 1 うーむ。わかりました、真の民主主義は自らの誤りを率直に認めます。それでは改めて、(急に早口で)
「火あぶりの極上スペシャル」に反対の方。(間髪入れず) はい、そこまで。(元のペースで) 反対者
がないようなので、満場一致ですね。

男1 男2 女2、拍手。

ミドリ ちよっと！ え？あんまりだわ。うわあーん！（泣き伏す）

男2 な、泣かせちゃいましたよ。

女2 ど、どうしましょう。

男1 かまいません。

ミドリ わーん。

女2 で、でも。

男1 あざとい女だ。（男2に）そういえば君、泣き落としは罰ポイントがつくんですよね。

男2 ええ。かなり加算されると思います。

ミドリ ！ …えーん。（声が小さくなる）

男1 魔女を連れて行きたまえ。

男2 女2 はい。（ミドリを連れて行くとする）

ミドリ いや！助けて！ おかあさんー！！

女2 え？（思わず手を離す）

男1 何をしているんですか。

女2 す、すみません。ちよっとびっくりして。

ミドリ （ハツとして）その声はおかあさんね。ほら、私ができる？ ミドリよ、私、ミドリです。

女2 ミドリ？ そりゃ、私にも「ミドリ」っていう子はいたわ。でも、その子は小さなときに死んでしま

った。

ミドリ それが私なの。生きていたのよ。お母さんの娘のミドリよ。

女 2 …。私の娘だっていう証拠はあるの？

ミドリ だって…。私ははっきりと覚えているわ。ほら、お祭りの日のことでした。わたあめや金魚すくい、

ゆかた

カタカタとなる扇風機のおもちや、きれいな浴衣を着られることをとても楽しみにしていたのに、その日は朝から土砂降りの雨でしたっけ。私は一日泣きっぱなしで、お母さんの困った顔を覚えています。

女 2 そんなこともあったわね。

ミドリ 夜になっても雨は降りやまず、私は悔しくてたまりませんでした。お祭りが楽しみなばかりに何日も何日もいい子に待っていたんです。もう神様なんか信じない。そう決めると、私は傘も持たずに外に飛び出しました。そうして雨の中をどこまでも、ただやみくもに走り続けたんです。

男 2 わかるなあ、その気持ち。

男 1 …。

ミドリ どのくらい走った頃でしょう。遠くの方からドドドドツツという耳慣れない音に、サイレンが鳴り響き、鉄砲水だという大人たちの声。気がついた時には私を一人になってしまっていたんです。…おかあさん！ 私、ミドリなの！

女 2 ほんとうにミドリなのね。帰ってきたのね。お祭りが大好きで、利かん坊きほんぼで甘えん坊だったミドリなのね。こんなに大きくなって…。ミドリ！（抱きしめる）

男 2 いいなあ、親子って。

女 2 (男1に) お願いです。この子が魔女のほすはありません。どうかもう一度調べ直してください。この子は私の娘なんです。

男 1 いやいや。その女は魔女です。証言もそろっています。

女 2 何かの間違いです。もう一度だけ、特別にお願いします。

男 1 目をつぶることはできません。しかし魔女を見逃せば、町の人々に迷惑が掛かります。

女 2 私が身代わりになります。

男 1 だめです。

女 2 お願いです！

男 1 魔力にやられましたね。(男2に) この女を隔離かくりしておけ。

男2、女2を連れて退場。

男 1 (正面に) みなさん、疫病が流行り始めています。予定を繰り上げ、急いで火あぶりの準備に移ります！ 思ったよりも相手は手ごわいようだ。

男1退場。

女1登場。ミドリの肩を叩く。

ミドリ あっ！

女ー どう、今からでも遅くはないわ。考え直した？

ミドリ でも無理です。契約書も破かれちゃったし。

女ー 契約書ならいくらでもあるのよ。(束で取り出す)ここにサインすればいいのよ。

ミドリ あなた、本当に魔女なんですか？ サインさせておいて、それを証拠に火あぶりにしようって魂胆こんたんでしよう。

女ー 今さら何を言うの？ サインしたってしなくたって、あなたはもうすぐ「魔女として」火あぶりのよ。どうしてわざわざ騙さなくちゃならないのよ。これは本物の契約書。

ミドリ じゃあ本当に魔女なのね。

女ー そうよ。

ミドリ 私、あなたのせいで火あぶりになるのよ！ 一体どういうつもりなの！ 何とも思わないの！（動けない）

女ー しかたないわ。町の人たちが私に気がつかなかっただけ。私のせいじゃないわ。

ミドリ 冗談じゃないわ！ 私と一緒に来て頂戴！ 私が魔女じゃない、ってのはつきり言ってよ！（動けない）

女ー 私だって火あぶりにはなりたくないもの。

ミドリ あなたねえ！（動けない）

女ー、ポンと手を打つと、ミドリは前につんのめる。

ミドリ …魔法を使ったのね。

女 | 信じてもらえたかしら。

ミドリ | その魔法で私を助けてよ。あなたの代わりに火あぶりにされるのよ。

女 | 残念だけど、魔女の力は自分のためにしか効き目がないの。あなたを助けられるのはあなただけよ。

ミドリ | そんな…。どうしたらいいかわからない。

女 | たとえば、風船になるのよ。風船になって空を飛び、町を抜け出すのよ。魔女になればそれができるわ。

ミドリ | でも。

女 | ためらうことないでしょう。魔女は人間と変わりないのよ。違うのは魔法が使えるかどうかだけじゃない。

ミドリ | …私、いやだわ。

女 | ものわがりの悪い子ね。トカゲやゴキブリになれっていうんじゃないでしょう。魔女なのよ。魔女と

人間をくらべたら月とスッポンじゃないの。どっちがいいか一目瞭然いちもくりようぜんだわ。魔法の使える「月」と何もできないスッポンと、どっちにするの？

ミドリ | …わからないわ。

女 | どうしてわからないの。魔女の方がいいに決まっているでしょう。

ミドリ | だけど、魂が…。

女 | そう、そんなに魂が大切なもの。じゃあいいわ。でも、魂を持っていたって天国に行けるとは限らないんだから。胸に手を当ててよく考えてみるのね。

ミドリ | フン！（そっぽを向く）

ナルシス、ミドリの鼻先に現れる。女―は消える。

ナルシス 誰と話していたんですか？

ミドリ べつに…。それより、どうして今ごろ、のこのこ出てきたの。私、もう火あぶりにされるのよ。

ナルシス しかたありません。あんなに人がいたので、とても助けられなかった。

ミドリ 頼りにしていたのに。

ナルシス あきらめないでください。

ミドリ そう簡単にあきらめないわ。

ナルシス 今度は大丈夫です。僕に考えがあります。(耳打ちをする) さあ、時間がありません。急いで！

ナルシス退場。追ってミドリ退場。

第三場

火あぶり台。祝典の装い。

男2、準備をしている。

男1登場。

男1

(男2に) そろそろ始めてもかまいませんか？　そうですか。(正面に) さてそれでは、これからが何百年に一度という魔女裁判のメインイベントです。この儀式がすすみますと、みなさま方とワインで乾杯ということになります。：あわてないでください。大丈夫です。ワインの樽は山積みで用意しております。町中で飲んでも一晩では飲みきれないくらいです。：押さないでください。あまり前に出てくると、火の粉をかぶって危険です。：静かに。静かにしてください。これは神聖な儀式です。たとえ魔女とはいえ、私たちは一人の女を火あぶりにするのです。生半可な気持ちでは呪いの餌食えじきになってしまいます。今日のために何年もかけてきた準備が、無駄になることのないように、魔女の最期をしっかりと見届けてください！

女1登場。男1に祝電を渡す。

男1

(見て) 本日は大統領閣下は残念ながらお見えになれないとのことですが、ここに祝電が届いております。「マジヨサイバン、セイコウオメデトウ、ダイトウリョウ」　ありがとうございます。それではお待ちかね、本日の主役に登場いただきましょう。この方です。ミドリ・ソヨカゼ！

ファンファーレ。

ミドリ登場。罪人の服装。縄で体をしばられている。その縄の端を持って、ナルシス登場。変装している。

男1男2女1、拍手で迎える。

ミドリ、あたりに愛嬌を振りまく。

男1 あまり明るくふるまわないでください。

ミドリ すみません。緊張しているんです、私。

男1 そうですか。

ミドリ、ナルシスに「やりすぎちゃったわ」というように舌を出して見せる。

ナルシス、「ドンマイ」の合図を返す。

男1、見とがめる。

男1 (男2に) ちょっといいですか。

男1、男2を前に連れ出す。ミドリも背後についていく。

男1 妙だと思いませんか、あの付き添いの男。なんだか嫌な予感がするんですよ。

男 2 そうですか？

男 1 私が付き添いにつけた男は左利きだったはず。しかし彼は、右手で縄を持っています。

ミドリ、合図をする。ナルシス、縄を両手で持ち直す。

男 1 男 2、ゆっくり振り向く。

男 2 両手で持っているからわかりませんね。

男 1 そうですね。しかし私のつけた男はもっと体格がよかった気がします。彼はとても小柄です。

ミドリ、合図をする。ナルシス、大柄に見えるようにふるまう。たとえば棒を使って肩幅を広く見せる。

男 1 男 2、ゆっくり振り向く。

男 2 いい体格をしていますね。りっぱな肩幅かたはばです。

男 1 そうですね。そういえば、いつもお気に入り首輪をしているんです。

男 2 首輪ですか？

ミドリ、合図をする。ナルシス、首輪をする。

男 1 男 2、ゆっくり振り向く。

男 2 していますね。

男 1 妙だな、私はネックレスのつもりで言ったんだが。

男 2 思い違いじゃありませんか。私には妙だと思えませんが。

男 1 そうですね。もう一つだけ確かめてもらえませんか。彼はハゲ頭のはずです。カツラをかぶっているんです。

ミドリ、合図をするが間に合わない。

男 2、ナルシスに歩み寄り、髪の毛を引っ張る。ナルシス、あわてる。

男 2 こいつはカツラじゃない、本物の髪の毛だ！ この男は偽物だ！

男 1 失礼！ その男は本物です！ カツラの話が嘘だったんです！
男 2 は？

男 1 誰かが私たちの話を盗み聞きしている気がしたものですから、ちょっと試してみたんです。しかし、
男 2 気のせいだったようです。

男 2 なんだ、人が悪い。

男 1 (正面に) とんだ醜態しゅうたいをさらしてしまいましたが、儀式を続けることにいたしましたしょう。

ナルシスと男 2、ミドリを火あぶり台に乗せてしばりつける。

男 1 (小声で) 今日はやけに素直なんですね。

ミドリ だってもう、どうしようもないじゃない。

男 ー いい心がけですね、それならもっと憎々しくにくにくふるまってください。泣きわめくとか悪態をつくとか。私たちはそういう魔女を期待しているんです。

ミドリ あら、そう。じゃあこうすればいいかしら。(態度を変えて) 助けて！ 私、魔女じゃないわ！ 助けて！助けて！

男 ー そうその調子です。(声を上げて) さあ、おとなしくしてください！

ミドリ (おとなしくする)

男 ー どうしたんですか？

ミドリ おとなしくしろって。

男 ー そうじゃなくて、憎々しくふるまってください。

ミドリ あ、そう。(態度を変えて) 助けて！ 私、魔女じゃないわ！ 助けて！

男 ー (声を上げて) おとなしくしてください！

ミドリ (おとなしくする)

男 ー ええい、いらいらする！ 最後に言い残すことはありませんか？

ミドリ べつに。

男 ー わかりました。期待に応えていただけなら仕方がない。そんなに死に急がなくてもいいと思えますがね。(男2に) もういい。火をつけろ！

男2、火あぶり台に火をつけようとする。つかない。

男 1 みなさんがお待ちかねだ。何をもたもたしている。
男 2 火がつきません！

ミドリをしばっている縄が落ちる。

ミドリ (罪人の服を脱ぎ捨て) ふん。

男 1 なるほど。そういうことだったんですか。

ナルシス (変装を解いて) そういうことだったんです。

男 1 君ならやりそうなことだと思えましたよ。みんなで作り上げてきた魔女裁判に、一人で反対して風紀を乱してきたんですからね。(拳銃を取り出し) 覚悟はいいんでしょね。

ナルシス (おもむろに拳銃を取り出し) あなたの拳銃はこれです。それはすり替えておいた偽物です。

男 1 なに！いつの間に！ちくしょう！(拳銃を投げ捨てる)

ナルシス (拾って) 嘘です。(持っていた拳銃を捨てる)

男 1 何だって！

男 2 このやろう！

男 1 男 2、とびかかる。ナルシス、空砲。男 1 男 2、驚いてとびのく。

ナルシス (拳銃を構えて) 魔女裁判を口実に、一人の若い女を殺そうとした。この悪だくみはみんなお前が仕

組んだんだ。

男 | 悪だくみじゃない。町の人々が心を一つにして、何年間もかけて。。。

ナルシス | それは聞き飽きた。問題なのは魔女裁判だ。こんな野蛮なことをしている町は他にどこにもない。

男 | だからこそ、他の町は疫病にやられてしまったんだ。

ナルシス、空砲。

男 | この町は違う。疫病に負けない自由な町だ。それぞれが自分の意志で魔女裁判に参加したんだ。何年間も心を一つにして準備してきたんだ。この町は本当に自由な町なんだ。

ナルシス、空砲。

ナルシス | 言い残すことはそれだけか。

男 | 心を一つにする、その支えとして、魔女という犠牲が必要だったんだ。

ナルシス | それなら、お前が犠牲になれ。

男 | ！ そうじゃない。この町はく（同じ主張を繰り返す）

ナルシス、懐から紙風船を出して、ミドリに渡す。

ナルシス | （ミドリに）それは僕の心です。君に預けます。人に復讐する時には、心は邪魔になるばかりです。

ミドリ 心……？

ミドリ、紙風船にくぎ付けになる。膨らまして、憑かれたように見つめる。
ナルシス、拳銃を構える。

男 | (ナルシスに) 待て、待つんだ！ 今私を撃っても、君は逃げられない。周りをよく見ろ。君は取り
囲まれている！

ナルシス そんなことはわかっている。命は捨てる覚悟だ。でも、ただでは死なない。あの人をおとしい陥れたやつら
は道連れだ。親玉のお前からだ。

男 | 待て！ 女のために死のうっているのか。君は若いんだ。命を大切にしまえ！

ナルシス 余計なお世話だ。

男 | 待て、待つんだ！ どうだろう、ものは相談だが、今までのことはなかったことにしないか。君はこ
の女を助けたいんだろう？ だから君たちは開放する。私たちは新しい魔女を捜す。そういうことで
手を打たないか。

ナルシス、空砲。

ナルシス お前のそういうところが許せないんだ！

男 | ひえええええ！

ミドリ、突然紙風船を割る。パァン。

ナルシス

(同時に) うわあっ！

男 1

(同時に) うわあっ！

ナルシス、崩れ落ちる。

女 1

ナルシス！（ナルシスに駆け寄る）

男 1

うわあ：（気づいて）なんともないぞ。（男2に）どうなっているんだ？

男 2

あの女が、あいつの心を引き裂いたんです。

男 1

心を引き裂かれたくらいで、そんなに簡単に人が死ぬのか？

男 2

死ぬこともあります。

女 1

（ミドリに）どういいうつもりなの？

ミドリ

ただの気まぐれ。

女 1

気まぐれ?! この子はあなたのために命を懸けたのよ。それなのに、この子の心をもてあそぶなんて。

て。

ミドリ

もてあそんでなんかいないわ。ただ、とても気になったの。

女 1

何が？

ミドリ

この風船を割ったら、どんな音がするのか。

女 1

…。

男 ー (ミドリに) 誰と話しているんですか。

ミドリ 魔女よ。そこにいるのが見えないの！

男 ー 魔女は見えませんが、一人の女がいます。

ミドリ それが魔女よ。その女は、悪魔に魂を売り渡したのよ。

男 ー 売り渡したのなら買い戻せばすむことでしよう。私たちは、魂を失くした者など恐ろしくありません。

ミドリ 私たちが、いいえ私が恐れているのは、魂を持っている女なんです。

ミドリ だって、魂を失くしたから魔女なんじゃない。

女 ー (ミドリに) あんたなんか人間じゃないわ。鬼よ。鬼！

ミドリ 自分こそ魔女のくせに！

女 ー 鬼！

ミドリ 魔女！

ナルシス (力を振り絞って) いいんだ、もういいんだ。どうせダメなんだ。だって、僕はピエロなんだもの…。

(息絶える)

女 ー 馬鹿！！(泣き伏す)

男 ー 魔女は二つの顔を持つんです。悲しみに心を奪われている女は魔女ではない。(正面に) 大丈夫です。

魔女を助けようとした者がその報いを受けただけです。私たちは心配ありません！

ミドリ、ゆっくりと手を上げ始める。

男 ー (見とがめて) 何をしようというんだ。まさか本当に魔法が使えるのか！？

ミドリ
いいえ、私はただの女よ。でも、たぶん、あなた好みの魔女になれるわ。

男 1
どういうことだ？

ミドリ
「魔女」を「まおんな」と読めば、それは愛人のこと。若いだけがとりえの「愛人」は私にぴったりだわ。

男 2
そんなことを言うと、お母さんが泣くぞ。

女 2 登場。

女 2
ミドリー！

男 2
お父さんお母さんを大切にしろ。

女 2
ミドリー！

ミドリ
あの人は私のお母さんじゃないわ。

男 2
なんてことを言い出すんだ。

男 1
自分の母親を見捨てるつもりですか。

ミドリ
私はあの人の娘なんかじゃない。全部作り話よ。

女 2
ミドリー！

ミドリ
「ミドリ」っていう名前は私だけじゃない。十七歳の女の名は、ほとんどがミドリよ。
バカな。

ミドリ
緑の風船はみずみずしい若葉の色。思い出を混ぜ合わせているうちに若さを手に入れた女は、みんな「ミドリ」と呼ばれるの。

男 1 嘘だ。緑は三原色の一つだ。思い出を混ぜてもできるはずがない。
ミドリ 緑は三原色じゃないわ。黄色と青から作るのよ。スイセンの黄色に、空の青さを加えるの。

ミドリ、手を挙げる。男2女1女2、崩れ落ちてシルエットになる。

男 1 すると緑は、三原色であって三原色でないのか。

男 2 (仮面をしている) そよかぜは強く吹き抜ける風でもなく。

女 2 (仮面をしている) じっと動かない風なまでもなく。

ミドリ 風でもなく、凧でもなく。

男 1 ミドリ・ソヨカゼ! お齡は!

ミドリ 十七歳。

女 2 大人でもなく、子どもでもなく。

男 1 国籍は! : いいや、国籍は不明ってことで妥協しましょう!

男 2 ニホンでもなく、ニッポンでもなく。

男 1 好きな季節は!

ミドリ 早春。

女 2 春でもなく、冬でもなく。

男 1 その理由は!

ミドリ 沈丁花かおが薫かほっているから。

男 2 沈香の香りでもなく、丁子の香りでもなく。

男 1 今一番あこがれているものは！

ミドリ 風船です。

男 1 ！？ 気をつけてください、羽もないのに空を飛ぶような連中にはね！ 魔女かその仲間が決まっています「！」

ミドリ 風船は空を飛びません。

男 2 空を飛ぶのでもなく。

女 2 地べたを這はいずるのでもなく。

ミドリ いつまでもふわふわと浮かんでいるんです。

男 1 そいつは危険な考え方だ！ 風船の運命は二つに一つだ！

男 2 空を飛ぶのでもなく。

男 1 空を飛ばずに地上に舞い降りるか！

女 2 地べたを這いずるのでもなく。

男 1 地べたを嫌って空高く吸い込まれるか！

ミドリ いつまでもふわふわと浮かんでいるんです。

男 1 そんなことは不可能だ！

ミドリ、手を挙げる。男1、崩れ落ちてシルエットになる。

ミドリ、ナルシスに歩み寄る。

ミドリ
かわいそうに。：ううん、違うわ。だってあなたは自分の信じたとおりに生きて、そして死んだんですもの。さようなら、ナルシス。私はもう行かなくちゃ。あなた一人にとらわれているわけにはいかないの。それに、あなたはあんなにあこがれていたピエロに、やっとなれたんですものね。

ミドリ、去りかける。

黄色以外の、色とりどりの風船が上空を流れていく。

ミドリ
あ、風船。：赤い風船は胸いっぱい的情熱の色。：青い風船は高く広がる空の色。：緑の風船はみずみずしい若さの色。

男
（力を振り絞って）向こう見ずしかとりえのない若さは、魔女に一番近い。ふわふわと浮かんでいられるうちはいい。しかし、ひとたび心を奪われてしまえば…。

ミドリ
（聞いていない）どっちに行こうかしら？ これからは、はっきり自分の道を決めておかなくちゃ。もうこんな目には遭いたくないもの。

黄色い風船が落ちて来る。

ミドリ
黄色い風船…。

ミドリ、受け止めようとしたところで暗転。

風船の破裂音。

ミドリ

(声だけ) キャーッ!

じわじわと黄色い闇が、舞台にひろがってゆく。

幕

(上演時間 約1時間)